様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：３３９１７
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０５２９

研究課題名（和文）主節不定詞のパラメター：比較統語理論と言語獲得を繋ぐ試み

研究課題名（英文）Parameters in Root Infinitives: A Study in Comparative Syntax and Acquisition

研究代表者
村杉　恵子（斎藤恵子）（Murasugi (Saito), Keiko）

南山大学・外国語学部・教授

研究者番号：００２３９５１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円、（間接経費）　　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：幼児はどのように動詞と時制等の一致の表現を獲得するのか。ドイツ語、オランダ語、フランス語などを母語とする幼児が主節不定詞現象を示すことはよく知られている。本プロジェクトでは、縦断的研究とコーパス分析に基づき、日本語を獲得する幼児においても、２歳前に、主節不定詞現象に見られる時制・補文標識に関する特徴を欠いた段階が存在することを提案する。
　さらに本研究では、主節不定詞現象は言語を超えて共通するが、主節内の動詞の形態は、世界を三分化することを提案する。不定詞、語幹の裸動詞、そして、代理の活用形がデフォルトとしてつけられる場合の三種類の幼児の動詞が、大人の形態的特徴を反映してあれわれることを示す。

研究成果の概要（英文）：How do the very young childrren acquire the verbal system? It has been argued that children go through the Root Infinitive (analogue) stage where tense is missing and no T- and C-related items appear in the natural production. We argue based on the longitudinal studies and corpus analysis that Japanese-speaking children, just like children learning other languages, go through the stage where tense is missing, and the stage can be well explained by the Truncation Hypothesis proposed by Rizzi (1993/1994).
We further argue that there are three types of Root Infinitive (anaoogues) in the child languages: Root Infinitives (Dutch, French, German, among others), Bare Verbs (English, Swahili, Japanese onomatopoeia among others) and Surrogate Infinitives (Japanese, Korean, Turkish, Kuwaiti Arabic, among others).The cross-linguistic analysis of the Root Infinitive (anaogues) phenomenon provides us a piece of strong evidence for the universality and the possible variations in child language.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：生成文法理論　主節不定詞現象　第一言語獲得　時制句　文法獲得　刈り取り仮説　原理とパラメター理論　Stem Parameter

１．研究開始当初の背景

生成文法理論では、母語獲得は、生後取り込まれる言語経験と、ヒトに遺伝により生得的に与えられた言語獲得機構との相互作用により達成されると仮定されている。この言語獲得機構は、(i) 全ての言語が満たす普遍的制約と、(ii)可能な言語間変異を定める制約からなると考えられているが、これらの制約の存在に関する母語獲得からの検討は、これまで主に欧米の言語を対象とした研究が中心となって行われている。

幼児の「誤り」を理論的に説明する分析として、幼児の「誤り」とは、母語以外の言語の文法（パラメター値）を仮定している段階であるとする仮説がある(Hyams 1986, Murasugi 1991, Sugisaki 2003, Roeper 2006 等)。幼児は、言語獲得の中間段階で、他言語において可能な大人の文法の枠内で、パラメター値を仮定するという仮説が、空主語現象や数量詞解釈、関係節構造、*wh* 移動の獲得等に関する実証的研究を基に展開されている。

幼児の「誤用」のひとつに、2 歳前後の動詞の形式がある。ヨーロッパ言語を中心とした獲得研究において、時制や一致を欠いた動詞形式が言語獲得初期に観察されることが 1980 年代後半から広くヨーロッパの諸言語について示されてきた。これは、“Root Infinitive 現象” (RI : 主節不定詞現象)と称されるが、それがどのような獲得段階を示すのか、不定詞を持たない言語においてどのように観察されるのかについては解明されていない点が多い。特に主語脱落を許す日本語、イタリア語を母語とする幼児は主節不定詞現象を示さないとする仮説が提唱されてきており、その理由も明確に示されていない。

本プロジェクトは、ヨーロッパの諸言語や英語を中心として展開されてきた主節不定詞現象が、いわゆる不定詞形をもたない言語にも在るのか否か、そしてそれはなぜかを問い、実証的理論的に研究するものである。

２．研究の目的

本プロジェクトは、主節不定詞現象について二つの側面から研究することを目的とする。

ひとつは、動詞の形態として、いわゆる不定詞形式が明確ではない言語においては、主節不定詞現象はどのようにあらわれるのか、その形態的特徴は、どのような特徴によって引き起こされ、世界の言語をどのように分けうるのかという記述的な側面に関して研究を深めることである。

いまひとつは、いったい主節不定詞現象とは、幼児の文法獲得の中間段階のどのような特徴を示し、その特徴は生成文法理論に対してどのような示唆を与えるのかという言語理論に関するものである。もし、記述的研究によって、主節不定詞現象がすべての幼児の言語獲得途上に観察されるものであると示されたならば、それはどのような形態であらわれ、それがどのような理由によるものであるのか、さらには、主節不定詞現象が人間言語のいかなる特徴を示すものなのか。

本研究プロジェクトは、上記の二点について、新たな反証可能性の高い仮説を提案することを目的とする。

３．研究の方法

ヨーロッパや英語を中心とした主節不定詞現象に関する論文を精査したうえで、主に日本語と母語とする幼児を対象とした独自の縦断的記述的研究とコーパス分を行い、主節不定詞現象の特徴が、それらの記述において存在するものか否かを調査する。

そこで得られた記述について一般化し、生成文法理論の枠組みで、対照言語学的視点から日本語を母語とする幼児の獲得過程を理論的に分析する。主節不定詞現象にみられる普遍的特性と言語間変異の可能な範囲を定める特性の存在について検討する。

４．研究成果

本研究プロジェクトの成果は、以下の三点にまとめられる。

第一点は、いわゆる動詞の不定詞形のない言語においても主節不定詞現象がみられるという実証的結論を得たことである。1 歳後半から 2 歳ごろにかけて、日本語を母語とする幼児は、「あいた」（「開けて」の意味）というように「た」形か、オノマトペ「シー」（「おしっこしたい」の意味）か、あるいはその組み合わせ「シーた」（「おしっこしたい」の意味）のいずれかを用いることが縦断的観察とコーパス分析の両方から得られている。その統語的特徴は、ヨーロッパ言語や英語の主節不定詞現象と共通している。その特徴とは、たとえば、イベント動詞を中心に観察され「た」が典型的にあらわす非現在の意味のみではなく要求や命令の意味用いられ、時制や補文標識に関連した要素はあらわれない。

第二点は、言語獲得に関する類型論的示唆を与えたことである。

先行研究を精査した結果、日本語のように一見時制を担うように見える接尾語が語幹に付けられ不定詞として用いられる現象は、韓国語、トルコ語、アラビア語などに共通して観察されると再分析された。

更にこの再分析に基づき、主節不定詞現象に関して対照言語学的分析を施した結果、世界の言語は三分割された:(i)語幹の独立できる屈折や活用を欠いた裸動詞（英語、スワヒリ語、日本語のオノマトペなど）、(ii)不定詞(フランス語、ドイツ語、オランダ語など)、(iii)　語幹がそれ自体独立できない言語ではデフォルトの接尾語が代理形として用いられる代理不定詞（日本語や韓国語、アラビア語など）。本研究は、主節不定詞現象には、言語の変異性として三つの異なる形態が存在し、どのタイプを幼児が産出するかは、その言語の動詞の形態的特徴に依ることを示している。この研究成果は、わずか 1 歳から 2 歳の幼児が、母語の形態的特徴を選択する能力を持つことを示している。

第三点は、主節不定詞とはなぜおきるのかについての分析を深めた点である。

上記の第一点と第二点をふまえ、本研究では、幼児の主節不定現象について言語間にある相同と相違を精査した結果、 (i)1 歳から 2 歳はじめに観察される RI 現象は、Rizzi(1993) の Truncation Hypothesis（切り取り仮説）で示されるように時制句のない段階であり、(ii) その段階にある幼児言語の動詞の形態は、世界の言語のタイプを三分化する(英語・スワヒリ語タイプ、日本語・トルコ語タイプ、ドイツ語・フランス語タイプ)。その動詞の形式の相違は動詞形態論(語幹の独立性)に関連するパラメターにあり、(iii)　2 歳以降のその現象は、時制句は在るが、Ken Wexler 氏などによる ATOM（Agreement and Tense Omission Model）仮説が提唱するようにＴの素性が未指定な段階で、この段階には、主格であらわれるべき『主語』に属格や与格が（随意的に）あらわれるという分析を提案した。

さらに、本研究は統語構造がいかに獲得されるのかという問いに対して、構造が必ずしも小さい単位（名詞、動詞など）から文などの大きな単位へと発達するわけではない可能性を示唆した。この提案の根拠は新たな記述的研究によるものである。幼児言語において時制句の切り取られている主節不定詞と同時期に、統語構造上、時制句よりも上部にあるはずの、談話との接点にある Speech Act Phrase の（終助詞）要素（「ね」「な」、「よ」等）が、中国語と日本語の両言語に共通して、早期に大人と同じ用法であらわれるとする成果を、本研究は得ている。それは統語構造の獲得が、必ずしも下から上へと構築されるものではなく、ジグゾーパズルにおける戦略のように、最上位の先端から下へと構築される可能性があることを示唆するものである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計８件）

① 村杉恵子 (2013) 「幼児の『誤用』はなぜ生じるのか：幼児の言語獲得における普遍文法の役割」学会誌 『日本語文法』 第 13 巻 2 号、19-36.くろしお出版. (招聘による講演)（査読あり）

② Murasugi, Keiko (2012) “Steps in the Emergence of Full Syntactic Structure in Child Grammar.” *Nanzan Linguistics* 9, 85-118. Center for Linguistics, Nanzan University. (査読なし)

③ Murasugi, Keiko, Tomomi Nakatani and Chisato Fuji (2012) “A http://tabelog.com/aichi/A2301/A230108/23005009/dtlphotolst/3/Approach to the Overgeneration of ‘no’ in the Acquisition of Japanese Noun Phrases.” In Ho-min Sohn, Hark Minegishi Cook, and William O’Grady eds. *Proceedings of the 19th Japanese/Korean Linguistics Conference*, 527-541. CSLI. *Stan*ford University. (発表要旨査読あり)

④ Murasugi, Keiko (2012) “The Intermediate Stages in the Grammar Acquisition: A View from Japanese,” In Bjarke Frellesvig, Jieun Kiaer and Janick Wrona, eds., *Studies in Japanese and Korean Linguistics*, 104-119. München: Lincom GmbH. (招聘による講演/査読なし)

⑤村杉恵子(2011) 「幼児の誤りを観てここに普遍文法を知る」『ことばの事実をみつめて一言語研究の理論と実証―』開拓社、東京，238-250. （査読なし）

⑥Murasugi, Keiko (2011) “The Linguistic Constellations: Relating Acquisition Phenomena with Parameter Setting” In Ming-le Gao, ed. *Universals and Variation: Proceeding s of GLOW in Asian VIII GLOW in Asia (Beijing)*. 35-40. Beijing: Beijing Language and Culture University Press. (招聘による講演/ 査読なし)

⑦Sawada, Naoko and Keiko Murasugi (2011) A Cross-Linguistic Approach to the Erroneous Genitive Subjects: Underspecificaiton of Tense in Child Grammar Revisited.” S*elected Proceedings of the 4th Conference On Generative Approaches to Language Acquisition North America*.] Cascadilla Proceedings Project, Somerville, Mass. 209-226. (査読あり)

⑧Murasugi, Keiko (2011) , “Japanese Syntax: Implications from Language *Papers from the Tenth Annual Conference of the Japanese Society for* Acquisition.” In Setsuko Arita et.al. eds, S*tudies in Language Sciences 10: Language Sciences*, Kuroshio Publishers, Tokyo. 17-39.（招聘による講演）（査読あり）

〔学会発表〕（計４件）

① Murasugi, Keiko. (2013) “Mimetics and Onomatopoeia as Japanese Root Infinitive Analogues.” *Grammar of Mimetics*, SOAS, University of London, London, GB. 2013 年 5 月 11 日. (招聘：Keynote Speaker)

②村杉恵子 (2012) 「こどもの『誤用』はなぜ生じるのか：幼児の言語獲得における普遍文法の役割」第 13 回日本語文法学会シンポジウム.名古屋大学. 2012 年 10 月 27 日. (招聘による講演)

③Murasugi, Keiko (2012) “Children's ‘Erroneous’ Intransitives, Transitives, and Causatives and the Implications for Syntactic Theory” NINJAL International Symposium on Valency Classes and Alternations in Japanese（国立国語研究所 国際シンポジウム「日本語の自他と項交替」），国立国語研究所. 2012 年 8 月 4 日.

④Murasugi, Keiko, (2011) “Child Japanese as a Window into Linguistic Variation.” British Association for Japanese studies. Oxford, GB. 2011 年 9 月 8 日. (招聘)

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
村杉　恵子（MURSUGI, Keiko）
南山大学・外国語学部・教授
研究者番号：００２３９５１８

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：